
純白の欠片を求めて～連合国トレジャー・ハンター～

NACONO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純白の欠片を求めて～連合国トレジャー・ハンター～

【Zコード】

Z4538Y

【作者名】

NACONO

【あらすじ】

「す、スリーニュースがあるから、俺ん家に来るんだぞ！」「アメリカに呼び出されたイギリス、フランス、ロシア、中国の連合四人。聞けばアメリカは『宝の地図』を見つけたという。最初はそれを全く信じない＆乗り気でなかつたイギリスたちだったが、アメリカの話を聞いていくうちにそれぞれの欲が掻き立てられ、彼の『冒険』に付き合うこと。ボケとツッコミあり、喧嘩あり、そして黒い笑顔にナルシストに意味不明物体に時々拳法ありの珍道中が今始まる！！

室の地図

部屋の中央に置かれた、大人数が座れるテーブルとそれに並べられた椅子。赤いじゅうたんとシャンデリアに彩られた、会議室らしき部屋に四人の人物がいた。

「何だよ急に呼び出しあがつて……」

最初に言葉を発したのはイギリスだ。

「お兄さんワインのテイスティングやら明日着る服の吟味やらで忙しいんだけど」

「すゞくどうでもいいことに時間費やしてるね～フランス君」

「もつと有効に時間を使うよろし！」

「なんかこの一人に言われると傷つく！」

「こちらではフランスが、ロシアと中国の言葉に半泣きだ。

「もし大した用事じゃなかつたら、これで頭を十発くらいポコッとやつていいかなあ？」

「やめろよ……この部屋を殺人現場にすんなよ……」

どこから持ってきたのかレンチを持って黒い笑みを浮かべるロシアに、イギリスが青ざめた。

ところでなぜ彼等がここに集まっているのか、それを説明しておこう。

遡ること数時間前、アメリカが、『すゞい一コースがあるから俺ん家に来るんだぞ！』と四人に言つてきたからだ。

しかし肝心のアメリカがまだ来ておらず、四人に苛立ちが募つていた。

するとその時、

「みんな、お待たせなんだぞ！！」

四人をここに呼び出した張本人、アメリカがやって來た。

「遅れといて詫びの一つもねえのかお前？」

「それがいつものアメリカある」

もう諦めるよろし、と中国が顔をひくつかせるイギリスの肩を叩く。

「で、何の用なわけ？俺できればもう帰りたいんだけどさ」

「僕達を呼び出すんだから、それはもう大きなことなんだろうなー」「フランスとロシアは、何も期待していない目でアメリカを見た。しかしアメリカはそれに構わず、

「そりやあ勿論さ。実は俺、すういものを見つけたんだ」

自慢げにそう言って何かを取り出し、イギリスたちに見せる。それはすっかり茶色くなつた一枚の紙だつた。詳細は見えないが、どうやら木々が生い茂る森の絵が描かれているよつだ。

「おい、なんだこのボロい紙切れは」

イギリスが呆れ顔で言つと、アメリカはムッとしたような顔で驚くべきことを言つた。

「何を言つてるんだいーー！」これは俺の家の倉庫から出てきた……宝の地図なんだぞ！――

「……は？」

「地図う？」

「宝の、あるか？」

「アメリカ君の家にあつたの？」

当然ながら四人は、それぞれ困惑した表情をする。だがアメリカは、さらに衝撃的な言葉を発したのだ。

「これから俺達で、宝探しに」 e t - s がのなんだぞ！――

「却下！」

まずそれに異議を唱えたのはイギリスだつた。

「そんな非現実的な話、信じられるか。俺はこんなお遊びに付き合うの、ごめんだからな」

「お兄さんも同感。どうせイギリスが置いてった『ミミ』か落書きなんじゃないの？」

「おい、どこに俺を出す必要がある？」

フランスがイギリスに続いた。

「大体宝なんて、映画やアニメの話ある」

「しかも家にあつたなんて、怪しいことこの上ないじゃない」

中国とロシアも、不信感のこもった目でアメリカを見た。

「いーや、絶対にあるね。だつてやけに道程が細かく書いてあるんだよ！」

一方のアメリカも退かない。すると彼はもう一枚の紙を取り出す。

「それにこっちの紙には、宝の特徴が記されていたんだぞ。えーと、

『それは濁りなき、純白の宝石のようなもの』で……」

「宝石！？」

それを聞いて、フランスがまず目を輝かせた。

「なんか俺、行つてもいいかもしれない……」

どうやら彼の美しい物に対する感覚が刺激されたようだ。

「嬉しいぞフランス。あとそれは、『内には不老長寿の効能を秘めているんだってさ』

「それ本當あるか！？」

次に反応したのは中国だ。

「我それ欲しいある！それ飲んで健康になつて長生きするよろしく！」

四千年は生きてるのに？といつロシアの言葉を無視して中国が興奮する。

「中國ものつてくれたんだな！あとはロシアとイギリスか……『また、光を受けて輝く様は向日葵にも例えられ』……どうだいロシア、君つて向日葵好きだろ？」

「宝石の向日葵かあ……ちょっと見てみたいなー」

ロシアは少し考えてから、

「僕もアメリカ君についていってもいいよ。ただ、何もなかつたら君の首をちょっとギューッてするけどね」

そう言つて笑つたが、その場の空気は凍り付いた。

「よし、じゃあこの四人で出発しようじゃないか

「おいちょっと待て！！俺完全に置いてきぼりじゃねえか！－！」

イギリスがアメリカに大声を出した。

「え？ だつて君、きっぱりと却下！ つて言つてたじゃないか

「あ、何？ もしかして本当は行きたいわけ？」

アメリカは首をかしげ、フランスはイギリスをからかうように笑つた。

「ばつ……そんなわけねえよ！ ただ話聞いてて、宝つてやつが現実的に思えてきたから、行つてやらなくもないというわけでな……」

そう言うイギリスの頬は少し赤かつた。

「素直に行きたいって言えばいいのにねえ」

「ツンデレだね」

「もう分かり切つてることあるがな」

「仕方ない、そこまで言つなら連れて行つてあげるんだぞ！－！」

「お前ら何で上から目線なんだよ！－！」

こうしてイギリスも加わり、五人で冒険の旅へ向かうことが決まりたのだった。

出発まで

それから五人は、出発に向けて準備をすることになった。

「何で冒険に爆弾持つてくの？ テロでもするつもり？」

フランスは訝しげな目で、支度ができたというイギリスを見た。

「どれが爆弾だつて？」

「それだよ」

フランスが指差した先には、イギリスの持つ黒い物体で満たされたバスケットがあった。

「これは俺が作ったスコーンだ！ れつきとした食料だらうがばかあ！」

「えー！ アメリカ以外の奴がそれ食つたら即死だよ！ 生き延びる可能性潰えるから！！」

「言いたい放題だなこの変態…… つーかお前も何だよその服装？」イギリスの目には、紫がかつた青色のロングコートに赤いズボンといふ、派手な服装をしたフランスが映っていた。

「何つて、これが俺流だよ。どうよこのセンス、イギリスのダサい服よりずっと美しいだろ～？」

「誰がだ？ ジャケットにネクタイは紳士のたしなみなんだよ！ お前みたいにチャラチャラしてねえんだ！！」

自慢気に話すフランスに、イギリスは感情をむき出しにする。

「全く、ガキみたいな喧嘩してんじゃねーあるよ。無駄な体力使うなよろし」

そこに、中国が呆れた表情でやつてきた。彼は一見すると何も持っていないように見える。

「中国、お前何で手ぶらなんだ？」

フランスが尋ねると、中国は胸を張つて答える。

「手ぶらじやねーある。必要最低限の物しか持つてないだけある

中国の服の内側から、サバイバルナイフとライター、水筒を取り出した。

「水と火があれば、あとは中国四千年の知恵でなんとかなるあるよ。現地調達が基本ある」

「そうそう。それだけあれば何でもできるよねー」

「ロシアも分かつてくれるあるか……つて！？」

中国は後ろから来たロシアに驚きの声を上げる。彼が持っていたのは大量のウォッカの瓶だったのだ。

「お前の荷物、それだけか？」

「うん。ウォッカは僕の燃料だからね。それにいざつて時火炎瓶に出来るように、とびきり強いのも何本か持つて来たんだー」

イギリスの質問に、ロシアは笑つて答えた。

「いざつて時、つていうのは……？」

フランスが恐る恐る尋ねると、

「うーん、動物に襲われた時に、それから君たちがあまりに勝手なことをした時かな。中国君、その時はライター貸してね」

ロシアはどこか黒い笑みを浮かべて答えた。

（多分アメリカ、死ぬんじやねえ（ある）か……？）

三人は急に寒気がした。

準備を整えた四人だが、アメリカがまだ来ていなかつた。彼はどんな準備をしてくるのかと各々が予想していた時、ついにアメリカがやって來た。

「Hey! 皆準備はいいかい？」

「！？」

四人はアメリカの格好を見て、言葉を失つた。

「何でカウボーイの格好してんの？」

「その縄で何を捕まえる気だ？」

フランスとイギリスの質問に対し、アメリカはなぜそんなことを聞

くのかという顔をした。

「え？ だって ノーティ・ヨーンズってこんな格好だつただろ？」

「なんか違う気がするのは我だけあるか？」

「多分気のせいじゃないよ」

「よーし、行くぞみんな！俺についてこい！！」

アメリカは一人の言葉に構わず、頭にかぶつた茶色い帽子を直しながら叫んだ。

だがこの時、アメリカとロシアを除く三人の胸には不安しかなかつたという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4538y/>

純白の欠片を求めて～連合国トレジャー・ハンター～

2011年11月24日19時55分発行